

指導行政のポイント

“教科書の日”の制定

菱村 幸彦

このたび、社団法人教科書協会が中心となって、「教科書の日」が制定された。4月10日に東京銀座のヤマハホールでその記念式典が開催され、私も式典に参加した。

「教科書の日」は、新しい教科書が児童・生徒の手に渡り、保護者にも教科書に対する関心が高まる時期である「4月10日」である。これには「4（良い）10（図書）」の含意もある。

小学生の詩をめぐるエピソード

「教科書の日」の制定の趣旨は、学校関係者だけでなく、広く社会一般の方々にも、教科書の重要な役割を認知してもらい、教科書関係の仕事に従事する者が、その社会的意義と責任を再確認することを目的としている。

改めていうまでもなく、教科書は、教科の主たる教材として、学校教育において重要な役割を果たしている。そのためには、教科書が子どもたちが学ぶべき基礎・基本をきっちりと盛り込んでいることが重要である。

で、以下に、1つのエピソードを紹介して、教科書における基礎・基本とは何かを考えてみたい。

もう、40年前の話である。ある小学生の詩を国語教科書に載せたところ、文科省の検定で不合格になったというのでマスメディアで問題となったことがあった。それは、こんな詩だ。

さら さるる ぴる ぼる どぶる

ぼん ぼちゃん

川はいろんなことをしゃべりながら流れていく

……

教科書検定で付された修正意見は、小学校の低学年では、川の流れについて「サラサラ」という基本的な擬声語を学ばせるべきで、この詩は教科書教材としては不適切というものであった。この意見は、教科書検定審議会の小学校代表委員が出したもので

あったが、児童の発達段階に応じた国語学習のあり方として、経験に即したもっともな意見というので、審議会も了承し、教材の差し替えを求めることになったわけである。

この検定に対して、マスメディアの評価は悪かった。子どものみずみずしい感性に溢れた詩を「川はサラサラ流れる」という紋切り型表現に合わないという理由で不合格にすると「非常識だ」と批判を受けた。文科省は「川の音まで押しつけるのか」という非難もあった。

紋切り型を学ぶことの意味

そうしたなかで、美術評論家の高階秀爾氏が、産経新聞（昭和46年4月30日夕刊）に「紋切り型の表現」と題して、次のような文章を寄せられた。

《（前略）たしかに「サラサラ」というのは、一種の紋切り型の表現である。それに対して、上に引いた小学生の詩は、きわめて新鮮に感じられる。だが、その小学生の詩が、なぜそれほどに「新鮮に」感じられるかということ、実は「サラサラ」というもうできあがった紋切り型の表現があるからにはほかならない。（中略）現在の日本語において「サラサラ」は、川の音としてすでに歴史的にも定着した紋切り型である。私は、小学校の教科書というものは、まずそのように歴史のなかで定着した紋切り型を子どもに伝えるのが第1の役割であると考え。「さらさるる……」が「新鮮なもの」と感じられる感覚を養うためには、まず「サラサラ」を共有することが必要なのである。》

高階氏は、格別、文科省に肩入れするつもりでこれを書かれたものではないと思う。さりげない文章であるが、ここには小・中学校の教科書のあるべき姿が明確に示されている。

（ひしむら・ゆきひこ = (財)学習ソフトウェア情報研究所 理事長）

本紙は、<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> でも掲載

●4月19日発売！

校長のための「新たな職」が機能する学校づくりの指南書！

『「新たな職」をいかに校長の学校経営』 浜田博文 [編] A5判 / 208頁 / 2,520円